

平成18年12月29日

〒590-0494

京都大学原子炉実験所
助手・小出 裕 章 様

〒177-0041 4-25

蒼天社政治情報センター
代表・石 川 鐵 也



公 開 論 議 書 Ⅲ

平成18年12月20日第592-37-19657-2号配達記録郵便での公開論議書Ⅱに対する反論書（12月25日付）を拝見しましたが、その実体はこれまで同様の言い訳的な繰り返しであり、常識ある人々を納得させるような反論書ではありませんでした。

よって、これまでの要点について結論づけしますので、今後、「事実と離れている点がある」とおっしゃるならば、どこが、どの様に異なるのかをご指摘願います。

— 記 —

1. 小出さんの主張「原子力発電を即時停止し、太陽エネルギー発電に移行するまでは化石燃料で発電する」についての結論－

私と論じたマスコミ28社の全てが、現状における原子力発電の必要性を認めているという事実からいっても、「原発即時停止は夢想論」と断じられます。

また、従来の国策のあり方批判についても具体的なものではなく、私・小出が政策立案過程に参画すればを繰り返しているだけです。どうしても参画したいのであれば、関係者が納得するような論文を発表すれば良いのです。「現実を踏まえ、過去を直視し、未来を展望する」。私も、以前よりこの様に唱えています。

2. 小出さんの主張「今後の研究で地層処分よりましな処分方法が見つかる可能性はあるのだから、今、安全の保証ができない方法で埋め捨てにしている」についての結論－

小出さんの主張は、「①安全の保証ができないものは作るべきではない②科学は一步步つ前進するが、現時点の科学は高レベル放射性廃物の処分の安全を保証していない③今の時点でできる唯一のことは、地上の保管施設で保管（中間貯蔵施設）すること④東京電力や関西電力本社の地下に保管施設をつくる（感情論）⑤地層処分に反対。地層処分も地上保管もどちらも危険だが、地上保管せよと言うのは、有事の対処ができるからです⑥安全に始末する保証ができないようなごみは生むべきでないし、原子力はやめるべきだ。これが私・小出の代案だ」と変化しておりますが、すでに生んでしまった核分裂生成物（高レベル放射性廃棄物）を何とかしなければならぬといった事実については合意しておりますので、地層施設の建設及び研究成果の公表をまって、地層処分が妥当なのか、それとも地上保管又は地下保管が妥当なのかを決定すべきだ、と私は考えます。

そのためにも、成果を得られる以前により多くの自治体が原環機構の公募に応募し、原環機構、都道府県及び市町村間における協定を締結し、関するメリット、デ

メリットを含めた調査情報の全てを国民に開示すべきなのです。

47人の知事が適切な議論もせずに、「そぐわない施設」と発言するだけで、全国市長村長の声が抹殺される現状では、国の強権によって47人の知事の声も抹殺される結果となるでしょう。このような事実の積み重ねが民主国家の崩壊につながることも学んでください。

3. 小出さんの主張「火力発電設備に余裕がある」についての結論－

「火力発電設備に余裕があったとしても、燃料が安定確保できなければ役に立たないことをも学んでください」と私が説き、小出さんは「当たり前のことです」と答えられました。

それならば小出さんにも理解できるでしょう。サハリン2で立証されたように、高度な武力を有する資源国ロシアが、国家主導の資源戦略を実施すれば、日本は否応なしに譲歩せざるを得なくなるのです。

ロシアだけではありません。中国の資源戦略もまた狡猾であり、原子炉実験所で手助けをしている小出さんの思いが及ぶものではありません。北方領土問題や拉致被害者問題等々、常に選択肢のない交渉方を繰り返すから進歩が見受けられないのです。より多くの選択肢を与えられることによって、交渉人にも精神的余裕が生まれ、臨機応変な交渉が実現するのです。交渉する以前から、マスコミ報道等により手の内をさらけ出すようでは勝てるものも勝てません。

多様性は学問にのみ求められている訳ではありません。エネルギー問題にも多様性は要求されるのです。火力発電設備に余裕があるからといって、それをもって原発廃炉を実施することはできません。原発を廃炉にした上で天然ガスに固執すればするほど、交渉相手に足元を見られてしまう。それが交渉というものです。小出さんには難解かも知れませんが、まず、そういった事実を把握してください。

そうすれば、原子力発電における使用済み燃料の再利用計画の意義をも理解できるはずです。

4. 小出さんの主張「原子力発電は安定電源ではない」についての結論－

当時の状況は私も把握しています。小出さんの主張「有無を言わずに一斉に全原発を停止させた事実」は存在しません。計画性をもって、計画的に停止し、稼働させることのできる電源、これが「安定電源の定義」です。

つまり、蓄電設備の完成度合いによっては、風力発電や太陽光発電なども安定電源となり得るのです。電力各社は、火力発電所を原子力発電のバックアップとのみ位置付けて維持している訳ではありません。

また、私が太陽光発電を忌み嫌っているという事実は存在しませんし、小出さんがいうところの太陽光発電のいっせい停止についても論じておりません。しかし、太陽光発電単体ならば、夜間はいっせい発電停止の状態となります。

5. 小出さんの主張「資料・データ」についての結論－

残念ですが、小出さんが今般提出されたデータを政府、事業者は必要としていないでしょう。

政府も、原子力発電のみを推進している訳ではありません。電源変更には長い時

間がかかることも承知しているでしょう。だからこそ、風力発電や太陽光発電にも着手しているではありませんか。小出さんも、長い時間がかかることを承知されているのですから、もう少し長い目で見守ってやったらどうですか。

6. 小出さんの主張「学問は多様性こそが命です」についての結論－

小出さんも、「学問は多様性こそが命」と発言され、「科学は進歩する」と断言されたのですから、リスクの克服にも助力してください。私も小出さん同様、貧資源国日本の現実を踏まえ、原子力発電の「必要性」を認めています。が、殊更に必要悪と強調するつもりはありません。

「困難が生じるからといって、そこで止めてはいけません。本来やるべきことであれば、どうすればそれができるかを考えることこそ政策の役割です」・・・この部分については、私の主張を丸写しされたのかと感じたほどです。同様部もあるので、安堵しました。

7. 小出さんの主張「何らのベネフィットも受けないままリスクだけを過疎地の住民に押し付けている」についての結論－

前項、同様部もありますので、生きる姿勢は同じだと思いますが如何でしょうか。ただし、私が沖縄問題を持ち出せば、小出さんは、絶対に「議論の逸脱」と書かれることでしょうね。沖縄問題は、沖縄返還時の約束事(表裏)が百パーセント公開されなければ解決の糸口は見つからないでしょう。沖縄が北陸沖に浮かぶ島ならば、米軍も固執しないのですが・・・。小出さんこそ当該議論に集中してくださいね。

さて、住民の多くが賛成しなければ、関する施設の誘致は実現しておりませんでした。民主主義社会におけるそういった事実からいっても、「過疎地の住民に押し付けている」といった小出さんの表現は的外れと言わざるを得ません。

また、財政破綻し、明日への活力をなくした夕張市民の姿をテレビで見る度に、次の施設の着工を心待ちにしている人々の笑顔が思い出されてなりません(反面、延期には衝撃をうけています)。こういった事実を踏まえれば、「何らのベネフィットを受けない、といった小出さんの主張は誤り」と断じざるを得ません。

責任をもって万が一の防災対策を企画し、損害補償をも実施するためには、人口密度も重要な課題となるのです。「都会で原発事故が発生してもよい」といった無責任な発言をされる小出さんには理解されないかもしれませんが、常識ある読者には理解されるはずです。

8. 小出さんの主張「このような論争にどれだけの価値があるか、私自身は首をかしげていますが」云々についての結論－

小出さんにはどのような見解が寄せられましたか。私の方には、小出さんがこれ程律義に対応するとは以外でした、といった意見の外は、その全てが、「参考にならない。無責任。だから助手」といったものでした。

論争に価値をみいだせるか否か、「それは本人次第」と言っても過言ではありません。役に立つものはストレートに活用し、そうでないものは反面教師にしてください。私のような浅学者と、京大で長年手助けをされている小出さんとが一緒であるはずがありません。しかし、経験によって学び成長することもまた事実です。

9. 小出さんの主張「石川さんの言う『外交の要諦』はかつて日本が世界の強国になろうとしてアジア諸国を侵略したのと同じ論理です」についての結論－

小出さんには資源国の戦略を理解できないようです。自国の利点を外交にも活用するのは当然のことです。そういった状況下における貧資源国日本の戦略はといえば、リスクの分散、資源の多様化を図ることなのです。

小出さんのように「現実の世界は、世界規模でも国内規模でも差別に満ちています。大切なことは、私たちがどのような世界を作りたいか、そして一人ひとりがどのように生きるかということです」と語れるのは、死の恐怖を感じず、余裕をもって生きている証しかも知れませんね。

「国連開発計画は、安全な水と衛生施設の不備から毎年200万人の子供が亡くなっているとして、主要先進国を中心に各国が解決に向けた行動計画を策定するよう求めた。米、英国では毎日水洗トイレで50リットルの水を流す人がいるのに対し、途上国では多くの人が1日5リットルに満たない汚れた水を利用している。にもかかわらず、衛生施設に投じられる予算は軍事費に比べて少額で、エチオピアで10分の1、パキスタンで47分の1でしかない(毎日新聞抜粋)」もまた現実です。

小出さんも「国の政策は広く、多くの事柄を考慮に入れながら、練り上げるものです」と書いておられますが、多くの事柄には上記のような問題も含まれているのです。実験所の助手でも知らないことが世の中には沢山あり、その是々非々など簡単に結論づけられるものではありません。

小出さんは「核兵器を実際に製造、保有する状況になれば、学者、技術者などさんの頼りにもならないことは歴史が示しています」と述べておられますが、どういった状況を想定しての発言でしょうか。状況によっては、小出さんも核兵器の製造に協力するということですか。

「長い時間がかかる」－「現実を踏まえ」と説きながら、原子力技術に手を染めてる小出さんが、「原子力技術に手を染めず」などと言ったところで、空しく響くだけだと思うのですが・・・空しくないですか。

10. 小出さんの主張「(失礼。こういうやり取りはお互いの品性が下劣になりそうでよくないですね・・・)もし、石川さんが私の回答が『質より量』だと思われるのであれば、お読み下さらなくてもいいと思います」についての結論－

議論とは、交渉とは、常に自分の思い通りになるものではありません。相手があるからこそ理論武装し、(他の予算を削っても)武力武装するのです。こういった道理もまた歴史によって立証されていますよ。

この程度の議論で、「私の品性まで下劣になるように感じます」と述べるようでは、小出さんの器が小さいと自白しているようなものです。武力での解決を望まないのであれば、相手の主張を理解することも学んでください。民主的解決というのは、「ある意味で妥協、互いの妥協による解決」と言っても過言ではありません。

今般の議論によって、原子力事故での死亡、住宅火災による死亡、交通事故による死亡等々、その死亡方による命の重さに変わりがないことを確認できただけでも一歩前進したのではありませんか。

以上